

ならざる事を感じ、我も壽やせん、仙にならましなど云ひ舉て、後には乞たりけるに、大さ尋常の桃より太く、又味も一しほ美なりとぞ、其五助と云るは此者なりとて、予に引合されしに、至極質朴の者にして、其年を問ふに、六十餘歳の由答けれども、顔色頗若く見え、未だ知命にもと思はれる、予其仙女の事を問しに、始には又もや仙女に叱られやせんとして答へざりしが、強て問しかば、漸にはなし出しけるに、桃を僕に賜り申せしは、いつも笠を被り申、鏡のやうなる物を首に掛けて、種々の事を僕に云聞せ賜り申せしが、此桃林の旦那にてあり申か、其うしろに桃を多く盆に入て持ち、又瓢を持ち、琴にても有申か、袋に入し物を抱き申せしもあり、其傍に遊べる女子等も、皆々首に守袋のやうなる物を掛申、何れも往昔の女子達にて有申せしか、其旦那の云聞せ賜申せしは、汝一人にて來らば、何時にても迎へん、必人に話すべからず、又遣す此桃も爰にて賜申て、外へは持行なと、堅く戒申されしを、ふと僕人々より嘲らるゝを、くちをしと思ひ、數度持歸り申て、人にも賜させ申せしなり、此桃を一顆賜り申置ば、持病の痲にて、屢々床にも著き申せしが、今は無病になり申、藥を賜り申事もなく、桃を賜させ申せし人々にも、誰一人其後病申せし人なしと、さすがに彼が國言の飭もなく譚するに、始は予も一概に信せざりしかども、其庫裏に在ける僧俗達の、我も賜申せしよ、彼も賜申されしと聞けるに、予も信まして、つらく思ひけるに、往昔琳聖太子、此山に登仙せし事、種々の文にも見え、今も樵夫等の深山に入るに、時々は異様な老翁に出逢ひ、又太子の乗馬と云る地に、垂るばかりなる振髪のもの等、見し事も有と聞ける、靈山なれば、其不思議なきにしもあらずと思ふ時から、此五助が奇事を薩藩の某關祐助、は、○中名廣國、は、略一巻の書となし置たまひしと聞ば、其概略をのみ誌し置ものなり、

雜載

〔拾芥抄下本諸教誠〕吉備大臣私教類聚目錄

第三 仙道不用事